

## ロラン・バルトにおける「恋愛のディスクール」と写真

守谷広子（東京芸術大学）

ロラン・バルト(Roland Barthes, 1915-1980)においては、執筆活動を開始した当初から晩年に至るまで、ジッドやプルーストなどによる数多くの「小説」が新たな記述を生みだすきっかけとして常にバルトの傍らにあった。バルトが自身の作品のなかに引用を繰り返すいくつかの小説は、言語学的、記号学的、更には文化的、歴史的な様々な問いをバルトの脳裏に喚起した。単に作品の分析に留まらない「小説」に注がれたバルトの情熱は、既存の作品についての独自の分析、個々の作品を貫いて見出される「小説」の形式そのものに関する議論、そして自ら小説を書く試みという三要素に区分することが可能であるように思われる。なかでも、バルトは第二の作業により多くの時間を割いており、その業績をわれわれは一連のテキスト論のうちに見ることができる。本発表においては、バルトのテキストに関する記述の終着点とも言える「恋愛のディスクール」について言及する。

「恋愛のディスクール」は、バルトによるそれ以前の文学批評や記号学の集大成としてのみならず、それに続く晩年の写真論や小説の実践に際しても、必要不可欠な土台として決定的な価値を保持し続けている。しかしなぜ「恋愛のディスクール」なのか。バルトは既に初の刊行書となる『零度のエクリチュール』において、現代小説の多くは、形式的のみならず、本質的に単純過去と三人称で語られていることを指摘している。そしてこのことは、バルトの現代的大衆文学にたいする批判的な態度を呼び起こす要因となるが、それに抗い書かれたテキスト論は、しかし1970年代に至る過程で袋小路に陥っていた。それまでのバルトの記述は、「テキスト」という概念の根底にある、主題を越えて見出されるべきバルトの普遍的な意志を必ずしも十分に伝えきれずにいた。バルトは作品の解釈を形式化するあらゆる制度を批判の対象としたが、しかしそれらを批判した後には、バルトが理想とする作品は実際いかにして実現可能であるかを語り、更にはそれを自ら提示してみせる必要があった。そしてその役割を少なからず負ったのが「恋愛のディスクール」である。結論から述べれば、バルトにとっては「恋愛主体」によって書かれた物語こそが、理想的な「小説」のあるべきすがたであり、それは単純過去、三人称によってではなく、現在形、（二人称を伴う）一人称で書かれるべきである。しかし「恋愛主体」が直ちに「狂気」と結び付けられる現代社会において、このようなバルトの理論の実践は無論困難を伴う。この点に注目し、本発表においては「恋愛のディスクール」の実践においてわれわれが直面する数々の問題点のなかから、特に小説を書く者であると同時に「恋愛主体」でいなければならない主体としての「作者」の困難を取り上げ、更にそのような「恋愛のディスクール」が孕む不可能性を乗り越える試みとしての「写真」についても検討を加えたい。